

岐阜県嚥下障害研究会
モグモグ通信
 No. 24 (2014. 5 発行)

11月30日の
 学術講演会岐
 阜西濃大会へ、
 たくさんのご
 参加をお待ち
 しています！

発行所：岐阜県嚥下障害研究会
 事務局：土岐市立総合病院 ST 室



「食べることへの支援」を考える

第 17 回学術講演会
 岐阜・西濃大会 大会長
 柴田 一浩
 (岐阜県立希望が丘学園
 児童発達支援センター
 技術主査 言語聴覚士)



この度、第17回学術講演会(岐阜・西濃大会)において大会長を拝名しました岐阜県立希望が丘学園の言語聴覚士、柴田一浩と申します。本学術講演会が実りある大会となるよう、2月に実行委員会を立ち上げ現在準備を進めております。

今回は「誰もが楽しく食べ続けるために ～食べることへの支援、キュアからケアへ～」を大会テーマとして、食べることへの取り組みを治療的な側面(キュア)のみでなく、食事環境を含めた日常生活全般にわたるトータルな支援(ケア)の一部として皆さんと一緒に考えてみたいと思います。

特別講演には全国的にタイムリーな話題の「認知症の摂食・嚥下リハビリテーション」について、その道の第一人者でありお話の内容がとても分かりやすいことで定評のある大阪大学歯学部附属病院 顎口腔機能治療部 医長 野原幹司先生にご講演をお願いいたしました。また、午後のシンポジウムでは『認知機能への支援を考えるー小児から高齢者までー』と題し、認知機能(先行期への支援など)にスポットを当て、小児から高齢者に渡る様々な立場の方からその取り組みをご報告いただく予定です。

さて、私が勤務する県立希望が丘学園では、医

療型障害児入所施設(旧肢体不自由児施設)と医療型児童発達支援センター(通園施設部門)を併せ持ち、医師、看護師、リハスタッフ(P T、O T、S T)、心理士、保育士等が協働し、子どもたちの治療、療育に携わっています。

学園における小児の摂食嚥下面への取り組みは古く、昭和42年(1967年)に医療リハビリテーション部内に言語専門職(S T)が配置されて以来、言語面に関する訓練とともに専門的な摂食指導にも関わってきています。特に最近では、重度脳性麻痺児における早期からの摂食・嚥下訓練の希望が増加傾向にあります。しかしながら、単に口腔領域の問題に対するアプローチのみでは解決できない難しさを日々実感するところ。とりわけ、「食べる力」を上げていくには、摂食嚥下の直接訓練だけでなく、子どもの発達支援も並行して進めながら、生活リズムや環境の調整、運動機能や心理的な関わりの促進、集団の力の利用、コミュニケーション機能の賦活なども大変重要な要素と言えます。これは、今大会のテーマに通じるものがあると思っています。

小児から高齢者までを対象に、その方の食べることを支える全ての関係者の皆様に、より広くより多くご参加をいただけますことを実行委員一同心よりお待ち申し上げます。



小児領域研修会 感想レポート

研修会に参加して

特別支援学校 教諭
高田 亜希子

今回の研修会では、「子どもたちの心に寄り添う療育」について、

1. 重度な障害をもつ子どもたちとのコミュニケーション
2. 姿勢と動作の分析
3. 日常生活の介助の工夫とポジショニングの、3つの視点から考えた。私自身、肢体不自由児の特別支援学校に勤務して4年になるが、子どもたちとのコミュニケーションでは、どんなに障害が重い児童生徒と向き合うときにも、必ず表情や微細な動き、身体全体の緊張等、わずかに限られた可動域のなかにも、一生懸命発信をしている子どもたちの心を読み取るようにしている。講演のなかで、「子どもとの心を繋ぐコミュニケーションは、コミュニケーションの基底にある力動感（何を大切にするの？今でしょう。）という、将来何かができるためにやっているのではなく、今ある能力を十分に生かしていく。そして、自前で光り輝く力を大切にする」というお話が印象に残った。

担任している児童は、「口での探索活動と摂食機能の発達」では、手をなめたり、吸ったりする段階である。そういった手と口で遊ぶことは、大事なことであって、そのことにより口の過敏がとれていくということは、以前から理解していたが、どの段階でやめさせたらいいのか、疑問に感じていた。今回の研修会の最後に質問させていただき、岸本先生から「必要があって、手や口をなめている。やめさせるのではなく、そこから広がっていくとよい。他のものを提示して、好きなものをふやしていくとよい。」というアドバイスを受けた。

平成26年2月22日（日）
 テーマ：「子どもたちの心に寄り添う療育」
 一心・体・生活一
 講師：フリーランス作業療法士 岸本光夫先生
 場所：希望が丘学園

摂食・嚥下障害は、口腔機能に注目してだけでなく、摂食・嚥下の5期モデル「先行期」



「準備期」「口腔期」「咽頭期」「食道期」のどこに問題があるのか、摂食時の姿勢や食形態など総合的に支援しなければ、解決しない。今回の研修会から学んだ「子どもたちの心に寄り添う療育」をするためには、専門性志向と協働志向でそれぞれのスキルを磨きながら、理学療法士（PT）と作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）、教員など、住み分けをしないでよいとこどりをする。そして、子どもの能力、良い点に目を向けながらたくさん褒めて、自己肯定感を高められるようにすることが大切であると感じた。『この先生と一緒にいることが楽しい！うれしい！』と、思ってもらえるような支援をしていきたい。



書籍の紹介

当研究会理事で、多治見口腔ケアグループはねっとの代表である、訪問歯科衛生士の栗木みゆき氏が、このたび書籍を出版されました。タイトルは「障害のある人たちの口腔のケア」で、¥1,400 クリエイトかもがわ より好評発売中です。監修は当研究会の理事でもある、朝日大学障害者歯科教授の玄景華先生です。文中には、名古屋大学小児科医師・三浦清邦先生をはじめ、地域でチームとして関わっていただいている多職種の各先生方のコラムも掲載されています。

保護者の方々や施設職員・学校教諭の方々等、一般の方にも大変わかりやすい内容となっております。多くの皆様にご購読いただけたら幸いです。

もくじ

- 1 口腔ケアとは
- 2 口腔ケアの大切さ
- 3 お口にはどんな働きがありますか？
- 4 お口の中はどうなっているのでしょうか？
- 5 お口の中の病気とトラブル
- 6 口腔ケアの仕方——安全に楽しく
- 7 口腔機能を高める口腔ケア——簡単口腔マッサージ
- 8 口腔ケア時のトラブルとその対応
- 9 場所別での口腔ケアとその注意点
- 10 障害別での口腔ケアとその注意点
- 11 歯科医療機関へのかかり方
- 12 地域連携の大切さ
- 13 多治見口腔ケアグループはねっと



玄 景華 監修（朝日大学歯学部口腔病態医療学講座）
栗木みゆき 著

（多治見口腔ケアグループはねっと 歯科衛生士）

A5版 104頁・本体1400円+税

クリエイツかもがわ



講習会・学術講演会案内

**第 17 回 摂食・嚥下リハビリテーション
初級講習会**

日時：平成 26 年 8 月 31 日（日）
9 時 30 分～16 時
会場：タウンホールとみか（富加町）

講師：加藤孝憲 土岐市立総合病院 研究会副会長
柴田一浩 県立希望が丘学園 研究会理事
川口千治 朝日大学附属病院 研究会理事
豊島義哉 国立病院機構東名古屋病院 会長

参加費：会員 1,000 円、非会員 3,000 円

年会費納入について

納入金額：平成 26 年度分 会費 1,000 円
 納入期限：8 月末日まで
 前年未納者は 2,000 円
 振込先：郵便振替 加入者 岐阜県嚥下障害研究会
 口座番号 00890-3-114142

＊通信欄に「〇〇年度分会費」とご記入願います。
 ＊“振替用紙の控え”をもって 会員証とします。
 ＊2 年間会費を滞納すると、自動退会となります。

（注）未入会者は 入会申込み手続きが 別途必要！
 問い合わせ：土岐市立総合病院リハビリテーション部
 言語聴覚士 加藤まで
 メール または FAX 0572-54-8488

第 17 回 学術講演会 岐阜・西農大会

日時：平成 26 年 11 月 30 日（日）
10:00～16:10
会場：大垣市情報工房 5F スイックホール

テーマ：誰もが楽しく食べ続けるために
～食べることへの支援、ケアからケアへ～

午前：特別講演

「認知症の摂食・嚥下リハビリテーション」
 講師 野原幹司 先生
 （大阪大学歯学部附属病院顎口腔機能治療部医長）

午後：シンポジウム

「認知機能への支援を考える
—小児から高齢者まで—」

- ★各シンポジストより報告
 - ・看護師の立場から（高齢者）
 - ・作業療法士の立場から（高齢者）
 - ・管理栄養士の立場から（高齢者）
 - ・生活介護支援の立場から（成人障がい者）
 - ・言語聴覚士の立場から（小児）
- ★指定討論 意見交換

— 編集後記 —
 栗木みゆき理事は 17 年前に、多治見口腔ケアグループはねっとを立ち上げ、以来、歯科衛生士として多治見市はもとより、岐阜県内外においてエネルギーに活躍されています。今回その集大成として、「障害のある人たちの口腔ケア」を出版されました。皆様のバイブルとなること必至です。是非ともお読みください。TOYO